

がんばります！県大会

6月29日（日）、気田川で開催される第61回静岡県鮎友釣り競技選手権大会の出場選手が決まりました。

県大会の出場選手は、過去の釣り大会の成績等を考慮し、組合代表として組合員の中から選出します。

なお、本年5月の役員会において承認された出場選手の選考基準は次のとおりです。

- ① 各釣り大会（県、地区、一般大会）の上位入賞者を来年度の選考対象とする。
- ② 他漁協の代表として県大会に出場する選手は選考対象としない。
- ③ 資質・可能性等を考慮し、公平感をもって選考する。

出場選手5名（地区名）※敬称略

鈴木伊佐夫（川根）、齋藤喜芳（島田）
塚本俊之（島田）、白幡光明（金谷）
津島和夫（大井川）、西條信二（補欠）
ご健闘を心よりお祈りいたします。

役員改選が行われました

3月23日の通常総代会をもって3年任期が満了し、組合役員が新体制となりました。

<退任役員>

鈴木省三（金谷）、西澤宏（伊久美川）
市川勇治（島田）、澤本延也（島田）

<新任役員>

山田司郎（金谷）、石神文雄（伊久美川）
酒井伸八（島田）、天野秀雄（島田）



（前列）退任役員の
鈴木さん、市川さん、澤本さん、西澤さん
永い間、ありがとうございました。

機関紙「ぜんない」第31号から

第1回

内水面漁協

増養殖研究所 内水面研究部
生態系保全グループ長
中村智幸さんの記事より

全国内水面漁連が発行する機関誌
「ぜんない」の一部をピックアップ
してご紹介します。

◇内水面漁協の運営や経営の研究を始めた理由(わけ)

およそ3年前の2011年（平成23年）の4月から、私は内水面漁協の運営や経営の研究に取り組んでいます。生物学者の私が、なぜ漁協の研究という社会的な研究を始めたのでしょうか？その理由は次のとおりです。

多くの国では、国や州、県などが内水面（川や湖）の水産資源や漁場を管理しています。それに対して日本では、漁業協同組合がその仕事を行っています。しかし、現在、内水面漁協の多くは、組合員の減少や高齢化のために活性が落ちています。そこで、漁協に元気になっていただくために研究を始めました。

残念なことに、「漁協なんていらない」という声を時々聞きます。しかし、私はそうは思いません。

なぜならば、漁協があったからこそ、魚や川、湖が守られてきたからです。

国民の多くが「川や湖に魚がたくさんいて欲しい。川や湖はきれいであって欲しい。」と願っています。しかし、一般の人々は日々の生活で忙しくて、そのための行動ができません。それに対して漁協は、日々、川や湖に向き合っています。

漁協が地元の人々の代弁者になってきたから、川や湖が良い状態で残っているのです。

漁協が解散すると、それまで「漁業権漁場」であった川や湖は「自由漁場」になります。自由漁場の管理を行うのは都道府県です。しかし、都道府県の水産関係の職員は、数が少なくて、川や湖に頻繁に行くことができません。そうすると、自由漁

場は毒や電気などで魚を捕ったり、禁漁期や体長制限などを守らない不逞の輩（ふていのやから）が跋扈（ばっこ）する「無法地帯」になってしまいます。内水面の秩序ある資源管理、漁場管理のために漁協はなくてはならないのです。

しかし、漁協にも変わってもらわなければならないことがあります。それは、「自分たち（組合員）だけ良ければいい」という考え方からの脱却です。多くの漁協で、収入のかなりの部分を遊漁料が占めています。遊漁料は釣り人が納めたお金です。お金を多く納めた人たちの意見や要望も聞かなくてはなりません。それが世の中の常識です。

次回から研究の成果をご紹介します。楽しみに待っていてください。